

COE-INES 外国出張レポート

COE-INES インドネシア国際シンポジウム "The Prospects of Nuclear Energy in Indonesia"

期 日：2005年3月1日～3月6日

出張者：創造エネルギー専攻博士後期課程1年 浦野真理

出張先：バンドン，インドネシア

発表

2005年3月2日から3日間の日程でインドネシア・バンドンにおいて開催された COE - INES 国際シンポジウムに参加した。シンポジウム2日目に行われたパラレルセッションで、私は協研究室で行っている燃料電池の開発についての発表を行った。原子力関連のシンポジウムであったため、発表内容は燃料電池の基礎的な説明を中心とする内容とした。水素需要が急激に増大することが確実なこれからの時代において、水素の大量製造が必要とされ



Photo<1> 発表の様子

る時期が必ず訪れる。そのような場面で原子力が重要な役割を果たすと私は考えている。したがって発表では化石燃料が引き起こしている環境問題の切り口から、水素エネルギーの重要性についても触れた。発表後の休憩時間にバンドン工科大学（ITB）の学生から直接質問を受け、意見をもらった。そこで自分の発表内容が伝わっていたことを知り安心した。数多くの島々から成るインドネシアでは、中規模の分散型電源として燃料電池が必要とされる可能性があり、その意味で燃料電池はある程度知られているらしい。しかしコストや耐久性などの性能を基本的には評価していない、という意見をもらった。

インドネシアの環境問題

初日のジャカルタ空港からバンドンへのバス移動で、交通渋滞につかまった。渋滞をつくる自動車の多くは日本車だった。窓から見える光景は自分の想像を遥かに超えるものであり、ここで起きているであろう深刻な大気汚染を案じずにはいられなかった。まさに地球規模で議論されているエネルギー・環境問題の「縮図」である。われわれのなすべき仕

事を改めて実感し、そのひとつの形として今回のシンポジウムがあるのだと思った。例えば、京都議定書では発展途上国の CO₂ 排出量削減義務は免除されている。しかし地球上のどの場所でも問題の重みは等しいと思う。われわれ先進国の人間は自国の事情だけを考えることなく、世界中に視野を広げる必要がある。むしろ急激な発展の渦中にあるインドネシアのような地域にこそ力を注ぐべきなのかもしれない。今回の海外出張は、途上国の現状を直接目にする事でエネルギー・環境問題を考えるよい機会にもなった。

学生同士の懇談

期間中、ITB の学生たちと親交を深めた。彼らの研究に取り組む姿勢には心から感心させられた。研究のモチベーションの話をしたとき、彼らはみな「社会貢献」を口にしていた。私の場合は「第一に好奇心だ」と答えた。現在、原子力発電が実用になく 10 年先の稼働を目指す国で、ひとりひとりの若者が原子力に自らの道を求めることには大きな決意が必要だと思う。インドネシアでは過去に政治的な理由で原子力計画の停止を経験しているからなおさらである。大学院で原子力を専門としても卒業後に原子力関連の職業につける可能性は高くないそうだ。赤道の少し向こう側でがんばっている彼らの姿を思いながら、これから私も自分の研究に励みたいと思う。



Photo<2> バンケット

今回の出張では ITB およびエネルギー庁 (BATAN) の見学も行われた。このような有意義な経験ができたことをたいへんうれしく思う。このシンポジウムを開催するにあたり多大なご苦勞をされた東工大の諸先生方、ITB の諸先生方ならびに学生の方々に心から感謝している。